



認知症の意思決定支援と看取り期の意思決定支援

- 成熟へ向かう最終章を支えるケア -

意思そのものは、最後まで残ります。ただ、その“表れ方”が変わっていくだけです。

意思は、言葉だけに宿っているわけではありません。・好きなものを見たときの表情・嫌なことをされたときの身体のこわばり・毎日欠かさず続けてきた習慣・どうしても譲らないこだわり・家族が語る『あの人らしさ』こうした一つひとつの中に、その人の意思が必ず残っています。

私たち介護職は、“言葉で選べなくなったから、もう意思はない”と見なしてしまうのではなく、**意思の表れ方が変わっただけだ**と理解して、その人の意思を“別の形で読み取る”役割を担っています。

社会福祉法人麦の家 田中美保子

1

それぞれの 現場での理念 麦の家支援から考える事

人は老いの過程においても 最期の瞬間まで成熟へ向かう：E.エリクソン

- 認知症が進んでも「意思」は消えない：言葉が減っても、心の動きは必ずどこかに表れる
- 言葉以外の意思の表れ：表情・行動・習慣に“その人らしさ”がにじむ
- 表情・行動・生活のリズム：長年の積み重ねが、今の選び方にそのまま現れる
- 好きな人・好きな場所：安心できる存在や空間に触れると、表情がふっと緩む
- 嫌がる時の反応：小さな拒否のサインこそ、大切な意思の手がかり
- 家族の語り：家族の思い出話に、その人の価値観の“原点”が残っている
- 看取り期は価値観がもっとも純度高く表れる時間：人生の最終章は、言葉より“その人らしさ”が強く立ち上がる
- 本人の価値観を読み取り、最期まで守り抜くことがケアの本質：選べない時は、価値観を代わりに表現することが支援になる
- 麦の家の創設理念として大切にしてきた視点：最期まで“その人のまま”でいられるよう支えるという原点

現場ごとの対話を重ね、理念をともに深めていく

2

今日、みんなで つかみたい 大事なポイント

- 認知症の意思決定支援
- 看取り期の意思決定支援
- 家族支援
- 医療連携
- チーム連携

3

意思決定支援とは その 1

看取り期の意思決定支援は、言葉ではなく、価値観を支える支援になります。

意思決定支援とは、“本人の価値観を代わりに表現する”という営みでもあります。

その人の人生の最終章を、その人らしく迎えられるように整えること。それが、私たちに与えられた、とても尊い役割

本人の価値観を中心に、選べる状況を整えること

- ● 本人の価値観を中心にするとは
- **その人が大切にしてきたこと**
「人生を通して守り続けてきた価値観が、今の選び方に表れる」
- **好き・嫌い、こだわり**
「小さな好みやこだわりは、その人の“安心の形”そのもの」
- **長年の習慣や生活リズム**
「積み重ねてきた日々のリズムが、最期までその人を支える」
- **家族が語る『その人らしさ』**
「家族の語りは、その人の価値観の“原風景”を教えてくれる」
- **過去の選択や人生観**
「これまでの選び方に、その人が大切にしてきた生き方が宿る」

→ 本人の価値観を“判断の軸”として扱うこと

4

意思決定支援とは その 2

選べないのは、・記憶の問題・比較の難しさ・抽象的な理解の難しさ・不安の高さ・周囲の雰囲気 こうした“環境や認知力の条件”の問題であって、その人の意思が消えてしまったわけではありません。だから私たちの仕事は、“選べないから代わりに決める”ことではなく、**選びやすい状況を整えて、その人の意思が表に出てこられるように支えること**

- **認知症が進むと選びにくくなる理由**
 - ・ 記憶の保持が難しい
「選択肢を覚えておくこと自体が負担になる」
 - ・ 選択肢の比較が苦手
「AとBを比べる“頭の整理”が難しくなる」
 - ・ 抽象的な説明が理解しにくい
「具体的なイメージが持てないと選べなくなる」
 - ・ 不安が強いと選べなくなる
「心が不安でいっぱいだと、判断の余裕がなくなる」
 - ・ 周囲の雰囲気に左右されやすい
「周りの表情や空気に影響され、本心が出にくくなる」
- 選べない＝意思がない、ではない

5

意思決定支援とは その 3

言葉以外の“意思のサイン”を読み取ることが、意思決定支援の核心です。私たちの仕事は、「言葉で答えられないから、代わりに決める」ことではなく、**言葉以外に表れている意思を丁寧に読み取り、その人の価値観に沿った選択を支えること**

- **言葉以外に表れる意思（意思の手がかり）**
 - ・ 表情の変化
「安心・不安・拒否が、言葉より早く顔に出る」
 - ・ 行動の選び方
「近づく・離れる・手を伸ばす。その選択に“好み”が表れる」
 - ・ 生活のリズム
「長年の習慣は、その人の価値観そのもの」
 - ・ 好きな人・好きな場所
「安心できる人や場所にいと、表情がふっと緩む」
 - ・ 嫌がる時の反応
「手を引く・顔をそむける。小さな拒否が大事な意思」
 - ・ 家族の語り
「家族の思い出話に、その人の“生き方の軸”が残っている」
- 言葉以外の“意思のサイン”を読み取ることが支援の核心

6

意思決定支援とは その 4

選べる状況を整えるとは、本人の意思が表に出てこられるように、周りの条件を整えることなんです。

私たちの仕事は、“答えを引き出す”ことだけでなく、**その人が安心して、自分のペースで、自分の価値観に沿って選べるように、場を整えること**

● 選べる状況を整えるとは

・静かな環境を整える

「音や刺激を減らすと、迷いが少なくなる」

・馴染みの職員が関わる

「安心できる人がそばにいと、選びやすくなる」

・選択肢は短く・具体的に

「抽象的な説明より、目の前の“具体”が選びやすい」

・一度に一つだけ提示する

「複数の選択肢は混乱を招く。1つずつが安心」

・ゆっくりした時間を確保する

「急かされると選べない。ゆっくりが意思を引き出す」

→ 本人が“選びやすい状態”をつくること

7

意思決定支援とは その 5

積み重ねから、“この人なら、きっとこう望むだろう”という方向性を、チームで丁寧に考えていく。

それが、看取り期の意思決定支援です。つまり、看取り期では、**言葉を聞く支援から、価値観を支える支援へと、意思決定支援の重心が移っていく**んです。

そして、その価値観を支える役割を担っているのが、まさに、皆さん一人ひとりのケアなんだと思います

● 看取り期ではさらに重要になる理由

・苦痛・不安・体力低下で言葉が出にくい

「心身の負担が大きいほど、言葉より表情や反応が先に出る」

・意識がはっきりしない場面が増える

「覚醒の波がゆらぎ、判断のタイミングが限られてくる」

・選択が『人生の最終章』に関わる

「日常の選択ではなく、価値観がもっとも強く表れる場面になる」

・本人の価値観がもっとも純度高く表れる

「長年の習慣や“その人らしさ”が、言葉より行動ににじみ出る」

→ 言葉ではなく価値観を支える意思決定支援が必要

8

認知症の方が
選びにくくなる理由

記憶の保持が難しい

「選択肢を覚えておくこと自体が負担になる」

比較が困難

「AとBを比べるための“頭の整理”が難しくなる」

抽象的説明が理解しにくい

「具体的なイメージが持てないと、選ぶことができない」

不安が強い

「心が揺れていると、判断の余裕がなくなる」

周囲の雰囲気左右される

「周りの表情や空気に影響され、本心が出にくくなる」

9

看取り期の
**意思決定支援の
特徴**

苦痛・不安

「心身のつらさが強いほど、言葉で希望を伝える余裕がなくなる」

体力低下

「起きて話すこと自体が負担になり、意思表示のタイミングが限られる」

家族の思い

「家族の願い・迷いが重なり、選択に影響が出やすくなる」

医療の判断

「医学的な選択と“本人らしさ”をどうつなぐかが重要になる」

選択肢が“最期の過ごし方”へ

「日常の選択ではなく、人生の締めくりに直結する重い判断になる」

10

意思決定支援

最期の選択を支える“三つの視点”

・① 本人の価値観

「その人が大切にしてきた生き方を軸にし、言葉が出にくい時は“長年の選び方”を手がかりにする」→ 最期の場面ほど、価値観が純度高く表れることを踏まえた支援。

・② 家族の意思

「揺れ動く家族の思いを丁寧に支え、本人らしさと家族の納得が少しずつ重なるよう寄り添う」→ 家族の迷い・不安を“支援の対象”として扱う姿勢。

・③ 医療との連携

「医学的判断と“その人らしさ”をつなぎ、治療・ケア・家族の思いが同じ方向へ向くよう橋渡しする」→ 医療の専門性と生活の価値観を統合する視点。

11

家族支援

家族と支援者が共有する大切な視点

① 家族の不安

「揺れ動く気持ちを否定せず受け止めることで、家族は安心して話し始められる」→ 不安は家族の判断にも影響するため、まず“安心の土台”をつくることが支援の第一歩。

② 状態の説明

「変化の理由を丁寧に伝えることで、家族は状況を理解し、迷いが少しずつほぐれていく」→ 断片的に見える変化を“流れ”として説明することが、家族の納得につながる。

③ 役割の明確化

「家族が何をすればいいのかを示すことで、迷いが減り、本人への寄り添いが安定する」→ 家族が“できること”に集中できるようにすることが、本人の安心にも直結する。

④ 休息の促し

「休むことも支援のひとつであると伝えることで、家族は自分を責めずに力を蓄えられる」→ 疲れは判断力や感情に影響するため、休息は本人支援の一部として重要。

⑤ 関係調整

「家族それぞれの思いを丁寧に整え、本人の価値観に沿って同じ方向へ向ける」→ 意見の違いは自然なこと。支援者が“橋渡し役”となることで、家族の心が落ち着く。

12

家族が抱える不安

① 間に合わないかもしれない

「後悔は、家族が大切に思う証。『もっと早く』という思いは、愛情の裏返しとして必ず生まれる」→ 家族は“時間”に対する不安を抱えやすく、支援者がその気持ちを受け止めることが安心につながる。

② 判断が正しいか迷う

「迷いは、本人を想う心から生まれる。正解のない選択を前に、家族は自分の判断を何度も問い直す」→ 家族の迷いは“弱さ”ではなく、本人を大切に思うからこそ生まれる自然な揺れ。

③ 苦しんでいないか

「家族の一番の願いは“苦しませたくない”。表情の曇りや小さな変化にも敏感になる」→ 家族は本人の痛みや不安を最優先に考えるため、支援者が状態を丁寧に説明することが安心につながる。

④ もっとできたのでは

「その思い自体が、深い愛情。どれだけ寄り添っていても、家族は自分を責めてしまうことがある」→ 家族の後悔は“愛情の証”であり、支援者がその努力を肯定することが大きな支えになる。

⑤ 役割がわからない

「家族の役割は、そばにすること。何をすればいいかわからない不安を、支援者がそつと整理する」→ 看取り期は役割が見えにくくなるため、支援者が“家族ができること”を明確にすることが安心につながる。

13

看取り期での 家族の揺れに寄り添う 5つのアプローチ

① 聴く

「まず、気持ちを受け止める。家族が安心して話し始められる“場”をつくることが支援の出発点」→ 不安や迷いを言葉にできるよう、評価ではなく受容から始める姿勢。

② 伝える

「状態をわかりやすく伝える。変化の理由を丁寧に説明することで、家族の迷いが少しずつほぐれていく」→ 専門用語ではなく、家族が“理解できる言葉”で伝えることが安心につながる。

③ 役割

「家族の役割を示す。何をすればいいかが明確になると、家族は本人に寄り添う力を取り戻す」→ 家族が“できること”を整理し、負担を減らしながら本人の安心を支える。

④ 休息

「休むことも支援。家族が自分を責めずに休めるよう、休息が本人のためにもなることを伝える」→ 疲れは判断力や感情に影響するため、休息はケアの一部として重要。

⑤ 調整

「思いを整え、同じ方向へ。家族それぞれの願いを丁寧に聞き、本人の価値観に沿って心をそろえていく」→ 支援者が“橋渡し役”となり、家族の揺れを落ち着けていくプロセス。

14



チーム連携 看取り期を支 えるためにチー ムで大切にしたい6つの視点

価値観共有

「本人らしさをチームの軸にし、判断が揺れる場面ほど価値観をよりどころにする」→言葉が減る時期ほど、価値観が純度高く表れる。

家族の希望

「家族の思いを丁寧に拾い、迷いや不安を支援の対象として受け止める」→家族の思い出話は、その人らしさの“起点”を教えてくれる。

医療連携

「医学と価値観をつなぎ、治療・ケア・家族の願いが同じ方向へ向くよう橋渡しする」→医療の判断と生活の価値観を統合する視点。

環境整備

「安心できる場をつくり、表情や反応が自然に出てくる“その人らしい空気”を整える」→環境は意思表出の大きな支え。

若手の相談ルート

「迷ったらすぐ相談できる仕組みをつくり、経験の差をチーム力で補う」→若手の不安を“チームの成長”につなげる。

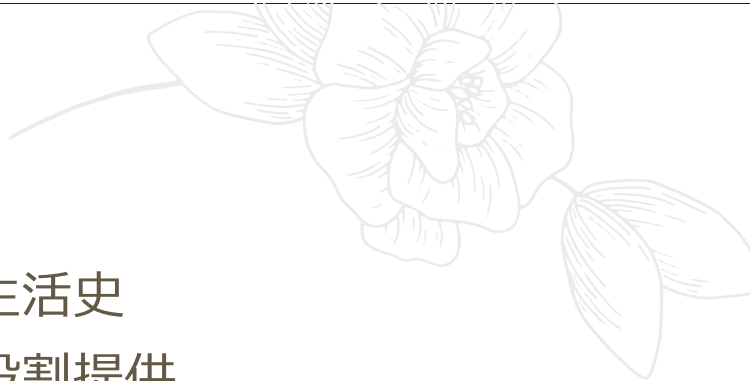
看取り後のフォロー

「最終章の余韻まで支え、家族の心が静かに落ち着くまで寄り添う」→看取りは“終わり”ではなく、家族支援の継続。

15



麦の家の「事例から (A氏の支援を通じて)

- 
- 生活史
 - 役割提供
 - 家族宿泊
 - 医療連携
 - 穏やかな旅立ち

16

その人の価値観を
最期まで。

その人の人生を
最後まで。

最終章の支援

「人生の最終章を、穏やかに支える。言葉よりも“その人らしさ”が強く立ち上がる時間を大切にする」→ 最期の場面ほど、価値観が純度高く表れる。

本人・家族・医療

「3つが同じ方向を向くと、支援は深くなる。本人の価値観を中心に、家族の思いと医療の判断を丁寧につないでいく」→ どれか一つだけでは支えきれない“三者の協働”。

チームで支える

「最期の時間は、チームの力で温くなる。迷いが生まれた時こそ、互いの視点を重ねて支援の質を高める」→ 一人ではなく、チームで“その人らしさ”を守る。

明日からの実践へ

「小さな一歩が、ケアを変える。大きなことを一度にやらなくていい。価値観に耳を傾ける、その一歩から始まる」→ 日々の実践にそっと重ねられる学び。

17

意思は消えない。人生は最期まで続いていく。

そのために私たちができることは、日々の“聴く”積み重ねを大切にしたい

「意思決定支援とは、“その人の人生を、その人のままに生きてもらうための支援”です。

認知症が進んでも、言葉が少なくなっても、意思は必ず残っています。表情の揺らぎ、手の動き、生活のリズム、好きな人の声にふっと緩む瞬間。そのすべてが、その人の“生きてきた証”です。

私たちが向き合っているのは、病気ではなく、その人が歩んできた長い人生そのものです。

看取り期は、その人生の最終章が静かに、そして美しく立ち上がる時間です。その章をどう閉じるかは、本人が積み重ねてきた価値観の延長線上にあります。

だからこそ、私たちの役割は、“選べないから代わりに決める”ことではなく、“**その人なら、きっとこう選ぶだろう**”と **価値観を代わりに表現すること**。これは、介護職にしかできない、とても尊い仕事です。

今日ここに集まった皆さんは、その人の人生の最終章を支えるために、自分の時間と心を使って向き合っている方々です。

どうか忘れないでください。

あなたがそばにすることで、その人の人生は、最後まで“その人らしく”あり続けます。

そしてその支援は、家族にとっては一生忘れられない“救い”になります。

皆さんのケアは、人の人生を照らす光です。その光がある限り、最期の時間は、必ず穏やかで、温かいものになります。

今日学んだことを、明日からのケアに、そっと重ねていってください。

18

参考文献・引用文献

- 
- トム・キットウッド／高橋誠一（訳）（2017）『認知症のパーソンセンタードケア』
箕岡真子（2020）『新しい認知症ケアの倫理』。
日本認知症ケア学会（2008）『認知症ケアにおける倫理』ワールドプランニング。
桜井厚『ナラティブ・アプローチ』勁草書房。
厚生労働省（2018）『人生の最終段階における医療・ケアに関するガイドライン』。
川内市医師会（2024）「看取りケアシート」。
日本老年看護学会誌（2024）「重度認知症高齢者の価値観表出支援に関する研究」。
順天堂大学研究グループ（2023）「その人らしさを尊重する看取りケアモデル」。
平本あきお『聞く技術』大和書房。
認知症介護研究・研修大府センター（2023）「認知症ケアスーパーバイザーの役割に関する文献研究」。